

今日の大学生における文化資本の社会的意味

— 関西と北陸・上越の調査結果の分析から —

大 前 敦 巳*

(平成17年10月31日受付；平成17年11月28日受理)

要 旨

本稿は、今日の大学生における文化資本をめぐる問題について、「学生消費者主義」や「大学の商業化」など、高等教育拡大がもたらした多くの国々に共通してみられる変化の状況との関わりの中で検討する。フランスの国立学生生活観察研究所（OVE）が実施する全国学生生活調査の結果を参照しながら、関西と北陸・上越の大学・短大生を対象に実施した質問紙調査の結果に基づき、学生の社会的出自、過去の学習経験、現在の学生生活との関係を分析した。親の職業や学歴に規定される階層文化以上に、後天的な学習経験や学生生活へのコミット／アルバイトを含む経済生活への親近性、という対立軸が、正統的文化／中間文化／大衆文化といった文化活動の違いを生み出す傾向が認められた。消費文化との連続性を持ちながら、文化資本の形成条件となる「必要性への距離」を提供しているのは、社会的出自よりも学校、特に大学の場においてであり、大学が変化に直面する中、その機能を衰弱させないことが必要と考える。

KEY WORDS

cultural capital 文化資本

student consumerism 学生消費者主義

distance from necessity 必要性への距離

effect of schooling 学校効果

1. 変化した学生生活の中で

今日の大学生をめぐる状況は、高等教育機会の拡大に伴うマス化・ユニバーサル化と、規制緩和や競争的環境の醸成など自由化・市場化に向けた大学改革が進行する中、日本のみならず多くの国々で共通する変化が生じている（潮木，2004）。学生生活の環境面においては、1970～80年代から「学生消費者主義」（Riesman, 1981=1986, 喜多村，1986）が台頭し、「大学の商業化」（Bok, 2003=2004）、「大学のマクドナルド化」（Ritzer, 1998=2001）などのように言われる消費文化の浸透が顕著になっている。

大学生自身のライフスタイルや生き方においても、武内編（2003）や溝上（2004）の調査研究が示しているように、集団としての学生文化を形成するよりも、消費文化の中で個人化・多様化した生き方やライフスタイルに変化している。特に近年、さまざまな不安の中で自己世界から出発してやりたいことを探しながら、勉学重視の生活を送る傾向が強まっていると言われる。

このような学生生活の変化がみられる中で、1960年代のフランスで、ブルデューらが「ディレクタント」な学生を念頭に置いて理論的に練り上げた文化資本の概念も、再検討を試みる価

* 生徒指導総合講座

値があると考ええる。『遺産相続者たち』から40年以上が経過した今日の大学生にとって、文化資本はいかなる意味をもち、それに基づく差異化や卓越化はいかに起っているのだろうか。

当のフランスでも、同様の学生の変化が起こっている。国立学生生活観察研究所 (Observatoire national de la Vie Étudiante : OVE) は、1994年から3年おきに全国学生生活調査を実施しており、最近では2003年に第4回調査が実施されている¹⁾。そこでは、ブルデューらが研究した当時の状況とは異なるものの、彼らが指摘してきたのと同じく²⁾「平均的學生 (L'étudiant moyen)」は存在しないと述べられる (Vourc'h, 2003a)。つまり、専攻コース、バカロレア種別、年齢、性別、地域、社会的出自など、各学生の置かれた社会的位置によって文化活動が多様に異なることが示される。この調査では、文化的慣習行動以外にも、住居や生活費などの学生生活の社会経済的条件について詳細な報告が行われている。

日本の大学生を対象にしたものとして、宮島・藤田ら (1987, 1991) が先駆的な実証研究を行っている。武内 (1999) は、学生文化の規定要因の1つに学生のハビタスを挙げ、大規模調査に基づいて親の学歴による学生生活の影響を指摘している。しかし、大学の今日的な状況をふまえながら、文化資本の相続や伝達の問題に焦点を当てた調査研究は依然として少ない。

そこで本稿では、今日の大学生の文化資本をめぐる問題について、関西と北陸・上越の大学・短大生を対象に実施した質問紙調査の結果に基づき、学生の社会的出自、過去の学習経験、現在の学生生活といかなる関係がみられるかを分析する。

Wacquant (1996) によれば、フランスにおける経済資本と文化資本の特有の関係は、相対的に自律した高等教育システムが、ブルジョワジーとグランドゼコールを結び合わせ、「国家貴族」という象徴的支配の下で巧みに隠蔽・正統化された階級再生産に寄与するところにある。そのようなシステムが歴史的に形成されていない他の国々においては、文化資本の概念が適用不可能になるわけではなく、フランスとは異なる形で資本間の関係を構成する配置構造が存在するという点に配慮する必要がある。本稿においても、この指摘を念頭に置きながら、今日の日本の大学生における文化資本の社会的意味について考察することにしたい。

2. 調査データの概要

本稿で用いるデータは、2002年に関西と北陸・上越の文科系1・2年次を中心とする学生を対象に実施した、学習経歴と学生生活に関する調査によるものである³⁾。調査対象校は、設置者 (国公立と私立)、地域 (関西と北陸・上越)、最も競争的 (selective) か否かという基準によって選び、回答のご協力をいただいた。調査では、関西の私立短期大学生にも回答いただいたが、本稿の分析では、クラブ・サークルを通じた文化活動がほとんど行われない短期大学の結果を除外することにした。サンプル構成の一覧は、表1の通りである。

この調査では、フランスのOVE調査と同様の文化活動に関する質問項目を取り入れており、その結果を中心に分析を進める。この調査ではまた、フランスのルーアン大学とパリ第8大学の文学・人文科学系学部でも、比較対照のために同様の調査を実施しており、その結果も合わせて提示する。

文化活動に関する質問は、次の8項目について「あなたは次の1ヶ月間に次のところに行きましたか」の問いに答えてもらったものである (ただしOVE調査では「カラオケ」は含まれない)。分析においては、それぞれの項目を3分類に再カテゴリー化したものを使用した。す

なわち、①「劇場」「クラシック・オペラのコンサート」「美術館・展覧会」を正統的文化、②「映画館」「他の音楽コンサート」を中間文化、③「スポーツ観戦」「ディスコ・クラブ」「カラオケ」を大衆文化とした。ただし、正統的文化／中間文化／大衆文化という区分は、字義通り所与の意味が与えられるのではなく、他の質問項目との関係を分析する中で事後的に社会的意味が付与されるものとみなす。

表1 「現代大学・短大生の学習経歴と学生生活に関する調査」サンプル一覧

対象校（文科系1・2年生中心）	実施時期	回答サンプル数
関西の最も競争的な国公立大学	2002.6	309
関西の最も競争的な私立大学	2002.6	272
関西の国公立大学	2002.7	147
関西の私立大学	2002.6	188
北陸の国公立大学	2002.7	375
北陸の私立大学	2002.6	204
上越教育大学	2002.1	293
ルーアン・パリ第8大学	2002.2～3	264

3. OVE 調査の結果から

調査結果の分析に入る前に、フランスの OVE 調査（2000年）で報告されている文化活動についての結果を概観しておきたい。まず、専攻コース別の行動比率をみると、グランドゼコール準備級（特に文科系）と大学の医学保健と文学・人文科学においては、劇場やクラシック・オペラのコンサートに行ったと答える比率が高く、短期高等教育機関ではスポーツ観戦やディスコ・クラブに行ったと答える比率が高い（表2）。このことから、フランスにおける文化活動は、ヒエラルキー化された専攻コースと対応する関係にあることがわかる。

表2 文化活動に関して過去1ヶ月間に行った場所（OVE 調査2000 専攻タイプ別） 単位%

	映画館	劇場	クラシック・オペラ	他のコンサート	美術館・展覧会	スポーツ観戦	ディスコ
準備級文科系	85.0	34.0	12.7	20.2	40.6	12.6	26.8
準備級理科系	73.1	13.3	6.2	14.8	15.2	19.9	26.2
医学保健	75.8	13.4	9.8	15.9	24.0	15.1	27.6
文学・人文科学	75.3	17.0	9.6	24.2	37.5	21.1	32.2
理学・工学	75.5	8.4	5.7	21.6	22.2	26.4	33.3
IUT 工業系	71.5	4.0	2.9	22.5	16.7	35.6	51.7
IUT 商業系	72.1	7.9	3.7	20.7	17.3	27.0	49.6
STS 工業系	73.3	5.6	4.9	22.1	20.8	43.0	56.9
STS 商業系	69.0	5.3	3.0	16.0	19.8	29.2	53.5
合 計	74.4	12.2	7.3	20.8	27.6	23.7	36.9

IUT は技術短期大学部、STS はリセ付設中級技術者養成課程（いずれも短期高等教育機関） 出典：Vourc'h, 2003a, p. 7

表3は、地域別の行動比率を示したものである。パリや大都市で劇場やクラシック・オペラのコンサートに行ったと答える比率が高いのに対し、地方ではスポーツ観戦やディスコの比率が高くなる。フランスの学生における文化活動は、地域差とも結びついている。

表3 文化活動に関して過去1ヶ月間に行った場所（OVE 調査2000 地域別） 単位%

	映画館	劇場	クラシック・オペラ	他のコンサート	美術館・展覧会	スポーツ観戦	ディスコ
パリ	77.1	23.1	12.2	18.1	38.3	12.4	25.8
パリ周辺	73.8	14.6	7.2	21.1	29.8	20.8	31.1
地方大都市	75.2	10.3	7.3	21.9	26.8	25.1	38.3
地方中都市	73.3	9.5	5.0	20.9	21.8	28.3	39.6
地方小都市	68.6	4.6	2.3	15.6	19.3	30.8	53.1
合 計	74.6	12.3	7.4	20.7	27.7	23.5	36.6

出典：Vourc'h, 2003b, p. 6

表4は、Vourc'h（2003a）が、OVE 調査結果からフランスの学生における文化的消費の特徴を整理したものである。それによると、劇場、美術館、クラシック・オペラのコンサートに行く傾向は、パリの高学歴で恵まれた階層において高く、女性および文科系学部やグランドゼコールを志向するバカロレア資格や高等教育進学に水路づけられている。他方、スポーツ観戦やディスコに行く傾向は、地方の庶民的な家庭で、男性および職業に結びついた資格や専攻を選ぶことと関わりを持っている。ブルデューらの指摘と同様に「平均的な学生」は存在しないと言われるように、今日においてもフランスでは、文化活動が社会的条件に結びついて多様に実践されている様子を看取することができる。

表4 フランスの学生における文化的消費の特徴

	劇場、美術館、クラシック・オペラのコンサートに行く傾向が高い	スポーツ観戦、ディスコに行く傾向が高い
性別	女性	男性
年齢	25歳以上	19歳以下
親の職業	専門職・管理職	農業
親の学歴	高等教育	中等職業資格（CAP/BEP）
バカロレア	文科系	職業系
バカロレア評点	優秀（tres bien）	可（passable）
専攻コース	グランドゼコール準備級文科系	中級技術者養成課程工業系
通学地域	パリ	30万人以上の都市
読書に関して	100冊以上を所有	100冊未満の所有
テレビに関して	毎日テレビを見ない	毎日テレビを見る

出典：Vourc'h, 2003a, p. 8

4. 関西と北陸・上越の大学生における文化活動の特徴

関西と北陸・上越の大学生においては、上記のフランスの結果とは異なる文化活動の特徴を見出すことができる。表5は、調査対象となった各大学における文化活動比率を表したものである。また、ルーアン・パリ第8大学とOVE調査(2000, 2003年)の結果も、比較対照のために合わせて記載している(表の網掛け部分)。

それをみると、関西と北陸の大学では、大学タイプにかかわらず比較的類似した傾向がみられ、「カラオケ」や「映画館」に行ったと答える比率が高い。「劇場」に関しては関西の国公立・私立大学において相対的に比率が高くなっているが、「クラシック・オペラのコンサート」になると北陸の国公立大学で最も高くなり、都市部と地方との逆転現象が起きている。「他の音楽コンサート」においても地方国公立大学での比率が高くなっている。これはおそらく、学内クラブ・サークルの楽団や合唱団が定期的に演奏会を開いており、そこに学生が参加していることも関係していると思われる。「美術館・展覧会」について、北陸の私立大学での比率が最も高くなっているのは、芸術系学科の学生がサンプルに含まれている事情による。フランスでは地方の庶民的な位置づけにある「スポーツ観戦」と「ディスコ・クラブ」をみると、都市部にある関西の大学生において盛んになっており、日本ではむしろ大都市文化に属しているといえる。これは、都市部にスポーツ施設が多くあるという条件の違いを反映していると考えられる。

他方、ルーアン・パリ第8大学ではOVE全国調査と類似して、「映画館」のほか「ディスコ・クラブ」「他の音楽コンサート」「美術館・展覧会」など、多様な文化活動に接する程度が大きい。これらのフランスの結果と対比させれば、関西と北陸・上越の大学生においては、文化活動を行う程度について、学校間・地域間の違いがあまりなく比較的同質性が高いと考えることができる。

表5 文化活動に関して過去1ヶ月間に行った場所

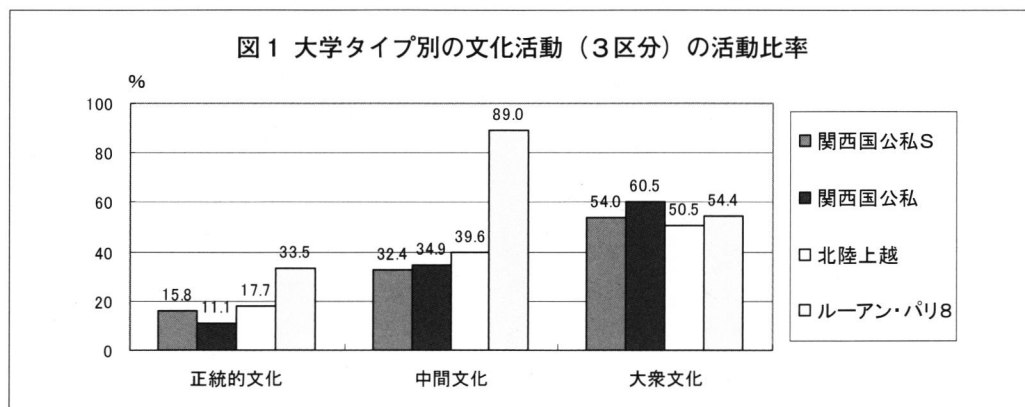
単位%

	映画館	劇場	クラシック・オペラ	他のコンサート	美術館・展覧会	スポーツ観戦	ディスコ	カラオケ
関西国公立S	18.2	3.3	1.6	9.8	7.2	13.7	3.4	43.6
関西私立S	31.4	4.8	2.6	14.0	16.6	15.5	4.1	50.9
関西国公立	31.3	4.1	1.4	8.8	8.2	18.4	6.8	46.3
関西私立	29.2	4.3	1.6	5.4	6.5	13.5	1.1	59.5
北陸国公立	30.9	1.1	5.6	12.4	16.4	7.0	0.5	34.1
北陸私立	29.6	2.5	1.5	6.4	23.2	2.5	2.5	46.8
上越教育大	34.1	1.0	2.4	12.6	5.8	3.4	1.4	66.2
ルーアン・パリ8	85.2	12.2	6.8	27.0	24.0	16.0	44.1	11.8
OVE 調査2000	74.4	12.2	7.3	20.8	27.6	23.7	36.9	—
OVE 調査2003	66.3	11.7	7.0	21.8	27.5	22.6	34.2	—

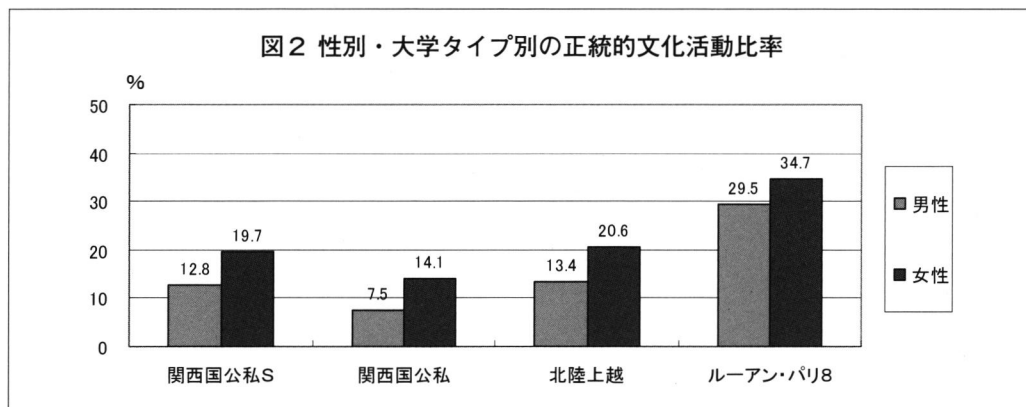
関西国公立S、関西私立Sは、最も競争的な大学

図1は、これらの文化活動を正統的文化、中間文化、大衆文化の3区分にまとめて、①関西

の最も競争的な国公立大学と私立大学（「関西国公私S」と略記）、②関西の国公立大学と私立大学（「関西国公私」）、③北陸の国公立大学・私立大学と上越教育大学（「北陸上越」）の3つに大学タイプごとに、活動比率を棒グラフに表したものである。大衆文化の活動比率は、どのタイプにおいても半数を超える程度で大きな違いがみられないが、正統的文化と特に中間文化になるとフランスのルーアン・パリ第8大学における活動比率が高くなる。



続いて、文化資本の形成において最も重要な正統的文化に着目して、属性別の活動比率をみてみたい。図2は、性別および大学タイプ別に、正統的文化の活動比率をグラフに表したものである。これを見ると、どのタイプの大学においても、正統的文化は女性に多く行われる傾向がみられる。



社会的出自との関係を見るために、父親の職業（図3）と母親の学歴（図4）を取り上げた。フランスのルーアン・パリ第8大学では、父親が専門職で母親が高等教育学歴であるほど、正統的文化の活動比率が高くなり、先のOVE調査の結果とも整合する。しかし、関西と北陸・上越の大学においては、いずれの指標においても社会的出自との明確な関連は見出されない。地方の北陸・上越の大学において、社会的出自による差が多少みられる程度である。

図3 父職別・大学タイプ別の正統的文化活動比率

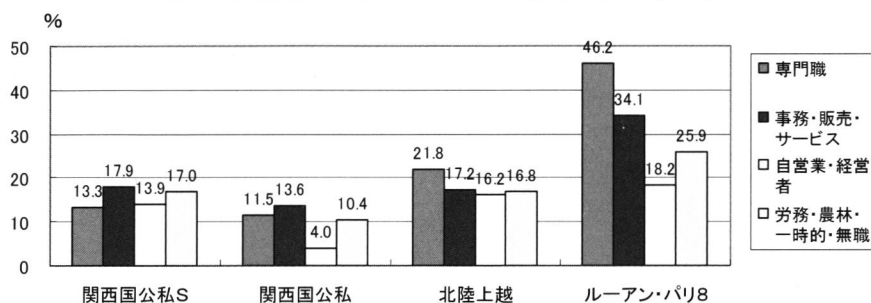
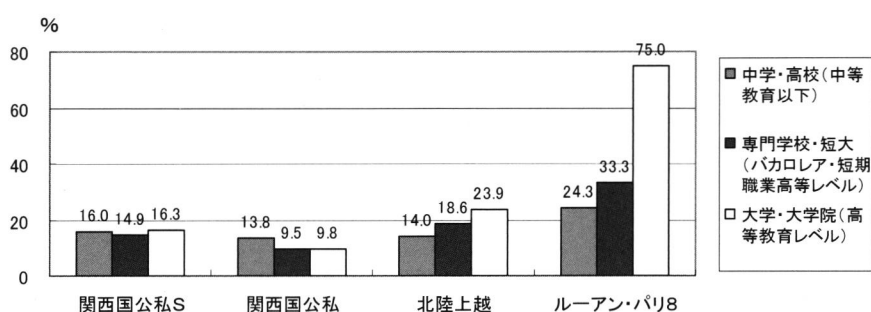


図4 母学歴別・大学タイプ別の正統的文化活動比率



過去の学習経験との関わりについて、初等中等教育時の家庭教育経験(図5)と習いごと経験(図6)を指標に取り上げた⁴⁾。関西と北陸・上越の大学では、家庭教育経験のある時期が多いほど、正統的文化の活動比率が高くなる傾向がみられる。習いごと経験については、ルーアン・パリ第8大学で大きな差が表れている。後天的に積み上げられる学習経験は、文化資本の獲得に少なからぬ影響を及ぼしているものと予想される⁵⁾。

図5 初等中等時家庭教育経験別の正統的文化活動比率

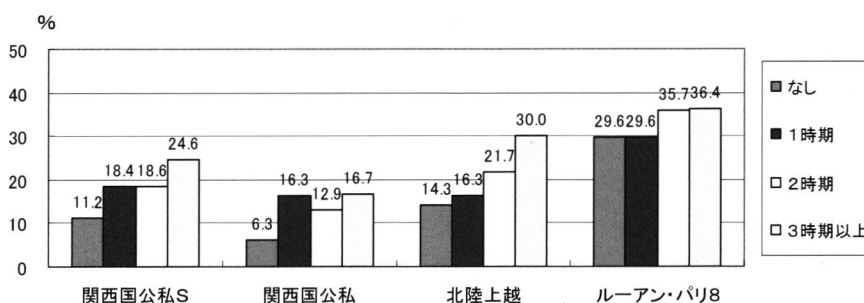
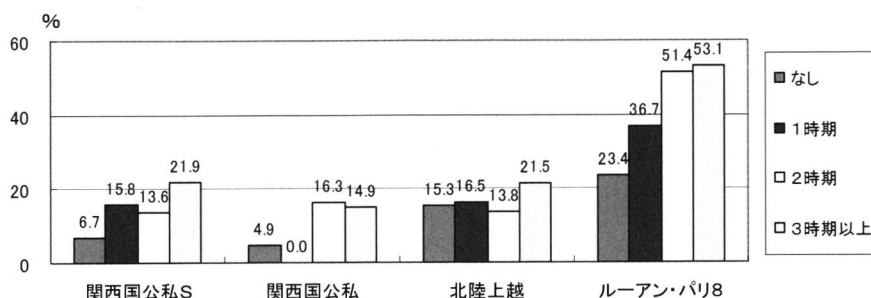
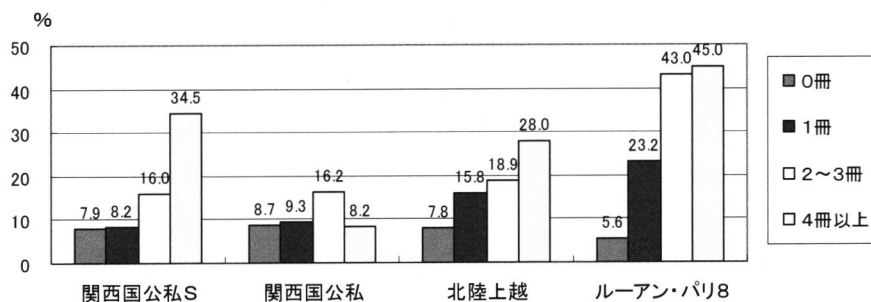


図6 初等中等時習いごと経験別の正統的文化活動比率



大学での生活のあり方は、当然ながら文化活動を行うことに結びついている。図7は、1ヶ月あたりの読書数（マンガを除く）との関わりを示したものであり、読書数が多いほど正統的文化が行われる傾向も大きくなる。また、大学内外でクラブ・サークル活動に参加している人は、そうでない場合よりも活動比率が明らかに高くなる（参加者／非参加者の正統的文化活動比率は、関西国公私S：24％／12％，関西国公私：21％／8％，北陸・上越：28％／14％，ルーアン・パリ第8：51％／22％となる）。

図7 1ヶ月あたり読書数別の正統的文化活動比率



以上の結果から、正統的文化へのアクセスを通じた文化資本形成という点において、関西と北陸・上越の大学生は、フランスのOVE調査やルーアン・パリ第8大学の事例とは異なる社会的意味を帯びている可能性が推察される。すなわち、文化的再生産の議論で指摘されるような、親の職業・学歴に結びついた出自階層文化に規定される面よりも、家庭、学校、地域などでの文化活動を通じて、後天的な経験から文化資本が獲得される面が重要になるのではないかとすることである。このことは、大前（2004a）が学業成功要因の意識面において、努力を通じた後天的な要因を重視した学習性向が形成されていることを分析した結果とも整合する。

4. 文化活動の社会的要因

関西と北陸・上越の大学生にみられた文化活動の特性について、互いの変数をコントロールした上で社会的要因となるものを特定の明らかにするために、正統的文化、中間文化、大衆文化の有無（過去1ヶ月間に行ったか否か）を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。独立変数として使用した変数は次の通りである。

- 1) 性別（女性）：男性を基準にしたダミー変数。
- 2) 父職業：「労務・農林漁業・一時的な仕事・無職」を基準。
- 3) 母学歴：中等教育以下を基準。ルーアン・パリ第8大学では、「専門・短大」はバカロレア・短期職業高等教育レベル、「大学・大学院」は高等教育レベル。
- 4) 家庭教育（家族から日常的に勉強を教えてもらう）経験、習いごと経験、塾・家庭教師経験：小学校低学年時、小学校高学年時、中学生時、高校生時の経験の有無（あり1、なし0）の合計点（0～4点）。
- 5) 外国滞在経験：大学入学以前に1週間以上外国で過ごした経験の有無について、経験なしを基準にしたダミー変数。
- 6) アルバイト経験：中学生時、高校生時、大学生時の経験の有無（あり1、なし0）の合計点（0～3点）。
- 7) 月読書数：1ヶ月に平均して読む本の数（マンガを除く）。
- 8) 日勉強時間：平日5日間の平均勉強時間（a）、土曜・日曜の平均勉強時間（b）について、1日当たりの平均勉強時間（c）を、 $c = (a \times 5 + b \times 2) \div 7$ の式で算出した値。
- 9) 授業をさぼる程度：「まったくない」0点、「ほとんどない」1点、「ときどきある」2点、「かなりある」3点とした4段階。
- 10) 学内外文化活動：大学内と大学以外のそれぞれにおいて、定期的に参加している芸術文化活動の有無（あり1、なし0）の合計点（0～2点）。

表7は、正統的文化について分析を行った結果を示したものである。これをみると、関西と北陸の大学では、父親の職業と母親の学歴による社会的出自の効果はみられず、家庭教育経験、習いごと経験、月読書数、日勉強時間が正の効果をもっており、上述のように後天的な学習経験や学生生活へのコミットメントを通じて獲得される傾向が強いといえる。また、学内外の文化活動への参加が、正統的文化へのアクセスを大きく規定している。

参考のため、表にはルーアン・パリ第8大学の分析結果も合わせて記載している。学内外の文化活動のほか、女性、母高等教育、外国滞在経験といった要因が正統的文化に関与しており、出自階層文化に規定される傾向はより大きく表れている。

このことから、関西と北陸・上越の大学生における正統的文化へのアクセスは、その社会的規定要因をより厳密に考慮した上でも、単に階級・階層文化の再生産という範囲にとどまらない文化資本としての意味が付与されていると考えることができる。

表7 正統的文化についてのロジスティック回帰

	関西と北陸上越の大学			ルーアン・パリ第8大学		
	回帰係数	標準誤差	推定オッズ比	回帰係数	標準誤差	推定オッズ比
女性	0.23	0.17	1.25	0.97*	0.48	2.63
父自営業・経営者	- 0.02	0.30	0.98	- 0.98	0.97	0.38
父事務・販売・サービス	0.05	0.21	1.05	0.37	0.49	1.45
父専門職	0.01	0.23	1.01	0.34	0.44	1.40
母専門・短大	0.05	0.19	1.05	0.10	0.40	1.11
母大学・大学院	0.13	0.20	1.14	1.75*	0.72	5.77
家庭教育経験	0.19**	0.07	1.21	0.08	0.14	1.08
習いごと経験	0.20**	0.07	1.23	0.12	0.15	1.13
塾・家庭教師経験	0.03	0.07	1.03	0.32	0.32	1.38
外国滞在経験	0.24	0.18	1.27	1.89*	0.89	6.59
アルバイト経験	- 0.01	0.10	0.99	- 0.12	0.23	0.89
月読書数	0.07**	0.02	1.07	0.14 ⁺	0.08	1.15
日勉強時間	0.21**	0.06	1.23	0.07	0.12	1.08
授業をさぼる程度	- 0.07	0.09	0.93	0.20	0.22	1.22
学内外文化活動	0.75**	0.13	2.12	1.06**	0.32	2.88
定数	- 3.34**	0.35	0.04	- 5.17**	1.19	0.01
-2 対数尤度	1121.929			205.962		
χ^2 値・自由度・有意確率	112.274	df.=15	sig.=.000	54.726	df.=15	sig.=.000
サンプル数	1409			209		

+ p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01

表8は、関西と北陸・上越の大学生における中間文化と大衆文化についての同様の分析結果を表したものである。中間文化については、女性、アルバイト経験、授業をさぼる程度、学内外文化活動が正の効果をもっており、1日当たりの勉強時間が負に作用する傾向を示している。社会的出自との関わりにおいては、父親が自営業・経営者であることに正の傾向が認められる。正統的文化と比べると、過去の学習経験には規定されておらず、大学生活へのコミットメントは学業面ではマイナスに規定されており、アカデミックな学校の領域から離れて消費文化における経済的な側面が関与しているように見受けられる。

このことがより一層顕著に表れているのが、大衆文化についての結果である。中間文化と同様に、アルバイト経験と授業をさぼる程度が正の効果、1日当たりの勉強時間が負の効果を示している。加えて、外国滞在経験も正の効果がみられるが、中間文化とは異なり、学内外文化活動の効果はみられない。授業に出席せず、勉強時間が少なく、アルバイト経験が多いという、勉学への非コミットが大衆文化に関与しており、大学生活から離れた消費文化と親和的である。とはいえ、中間文化、大衆文化とも、社会的出自の違いに結びついているわけではなく（大衆文化は、父親が事務・販売・サービスの場合にむしろ正の傾向を示す）、その点では正統的文化を含めて相同であるといえる。

表8 中間文化と大衆文化についてのロジスティック回帰（関西と北陸・上越の大学）

	中間文化			大衆文化		
	回帰係数	標準誤差	推定オッズ比	回帰係数	標準誤差	推定オッズ比
女性	0.59**	0.13	1.80	0.00	0.12	1.00
父自営業・経営者	0.41*	0.21	1.51	0.16	0.21	1.18
父事務・販売・サービス	0.15	0.16	1.16	0.28*	0.15	1.33
父専門職	0.22	0.18	1.25	0.21	0.17	1.24
母専門・短大	- 0.23	0.14	0.80	0.04	0.14	1.04
母大学・大学院	0.00	0.15	1.00	- 0.14	0.14	0.87
家庭教育経験	0.05	0.05	1.05	0.04	0.05	1.04
習いごと経験	0.05	0.05	1.05	- 0.04	0.05	0.96
塾・家庭教師経験	0.00	0.05	1.00	0.05	0.05	1.05
外国滞在経験	0.27*	0.14	1.32	0.32*	0.14	1.37
アルバイト経験	0.46**	0.08	1.58	0.41**	0.08	1.50
月読書数	0.02	0.02	1.02	- 0.02	0.02	0.98
日勉強時間	- 0.10*	0.06	0.90	- 0.28**	0.05	0.75
授業をさぼる程度	0.15*	0.06	1.16	0.17**	0.06	1.18
学内外文化活動	0.22*	0.11	1.25	- 0.08	0.11	0.93
定数	- 1.84**	0.25	0.16	- 0.35	0.24	0.71
-2 対数尤度	1761.193			1846.589		
χ^2 値・自由度・有意確率	102.708	df.=15	sig.=.000	100.818	df.=15	sig.=.000
サンプル数	1409			1409		

+ p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01

実際、図8・9に示したように、中間文化と大衆文化は、どの大学タイプにおいてもアルバイト経験が多いほど活動比率が高くなる。その傾向は、関西と北陸・上越の大学において顕著に表れており、消費文化の影響を大きく受けていることをうかがわせる。

図8 アルバイト経験別の中間文化活動比

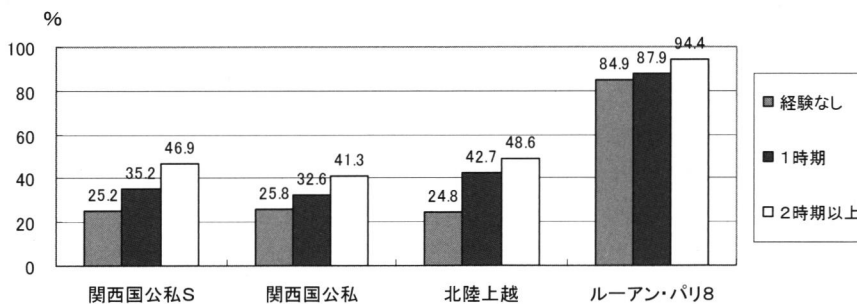
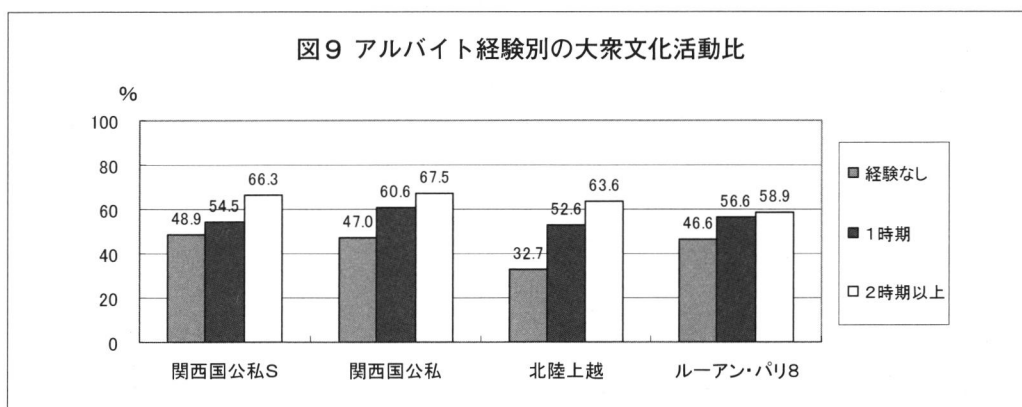


図9 アルバイト経験別の大衆文化活動比



以上の結果、正統的文化との関わりも含めて考慮すれば、後天的な学習経験や学生生活へのコミット／アルバイトを含む経済生活への親近性、という対立軸が、正統的文化／中間文化／大衆文化といった文化活動の違いに結びついていると考えられる。それゆえ、出自家庭から文化資本を相続継承して文化慣習行動の区別（卓越化：distinction）を生み出す面を強調するフランスの文化的再生産の議論とは幾分異なり、社会的出自の影響以上に学校的な学習に対する関係が重要な意味を帯びてくる。

もちろん、このことは日本で文化的再生産が起こっていないことを意味するわけではない。今日の学生生活において全体として消費文化がくまなく浸透し、学校的な学習に結びつく形で消費文化以外の文化活動が実践されるとすれば、学校や大学のあり方によって、文化資本の形成をめぐる社会的格差の程度が異なってくるであろう。教育が変化にさらされる中、問われる課題の一つがここにあるのではないかと筆者は考える。

5. 大学が提供する「必要性への距離」

最後に、関西と北陸・上越の大学生を対象とする調査結果から、今日の消費文化の影響を受けた文化資本の社会的意味について若干の考察を試みたい。フランスのOVE調査およびルーアン・パリ第8大学の結果に比べて、正統的文化と中間文化の活動程度が大きくなり、カラオケに象徴される消費文化が盛んであり、それらは大学タイプや社会的出自による直接的な影響を受けるものではなかった。中間文化と大衆文化は、アルバイト経験に結びついていることから、消費文化との連続性が高いことが確認された。それに対して、正統的文化は、後天的な学習経験やクラブ・サークル活動への参加に結びついて行われることが多く、文化資本の形成条件となる「必要性への距離」を提供しているのは、社会的出自よりも学校、特に大学においてであることが看取された。

「必要性への距離」に基づく文化的卓越化についてよく知られるのは、ブルデュー（1979=1990）が、上流階級／中間階級／庶民階級というフランスの階級間関係を、文化慣習行動との関わりにおいて、「卓越化の感覚」／「文化的善意」／「必要なものの選択」という関係で言い表したものである。この関係を関西と北陸・上越の大学生の文脈において敷衍すれば、学校的に行われる傾向の強い正統的文化は、ブルジョワ的な「卓越化の感覚」よりも、

上昇志向を伴った「文化的善意」に近いかもしれない。しかし、出自階級による正統的文化の象徴的押しつけ効果が強くないのであれば、たとえ学校的に獲得されたものであっても「善意」に閉ざされる宿命となるわけではなく、その制約を越えて自由になることも可能であると考えられよう。

消費文化の浸透が著しい今日の大学生において、さらに重要な問題になるのは「必要なものの選択」に対する関係である。アルバイト経験に結びついた消費文化が大多数の学生に受け入れられているとはいえ、「必要なものの選択」に閉じられたものになるか、そこから自由に開かれたものになるかでは大きく意味が異なってくるだろう。その条件になっているのが、正統的文化や中間文化の実践を生み出している大学生活へのコミットメントである。フランスのように階級文化の影響を前提にしなくとも、文化資本の形成が学校効果に依存しているとすれば、むしろそうであるがゆえに学校（および大学）が文化的再生産に及ぼす影響は大きくなると考えられる。学生生活が消費文化との親近性を増す中で、大学が必要性への従属を是認してしまうことは、文化資本へのアクセスを保障する意味において問題があり、「必要性への距離」を提供する大学の機能を衰弱させないことが必要と考える。

注

- 1) OVE は、1989年に国民教育省によって設立された研究所で、これまで過去4回（最近では2003年）の全国学生生活調査のほか、機関誌の発行、学術賞の授与、ヨーロッパ委員会が主催する国際比較プログラム（EUROSTUDENT）への参加などの事業を行っている。ただし、この国際比較では、本稿で分析する文化活動については共通比較項目として取り上げられておらず、代わりに外国語能力、外国滞在経験などの国際化が項目に取り上げられている。調査方法に関しては、大学、大学付設短期大学部（IUT）、中級技術者短期養成課程（STS）、グランドゼコール準備級の学生を対象に、20分の1の学生（グランドゼコール準備級は10分の1）を無作為抽出し、郵送法によって質問紙を配付・回収している。2000年調査では、約72500名の学生に調査票を郵送し、26376名の有効回答票が得られている（回収率36%）。
- 2) 『遺産相続者たち』（p.65）において、学生は社会全体の中でも固有の勉学サイクルと余暇を持っているように見えるが、それは出身階層によって多種多様な仕方で差異化された集団であり、本当に同質の、独立した、統合された社会集団を構成しているのかどうかは疑わしいと述べられている。
- 3) 同じ調査データを用いた分析は、大前（2003, 2004a）においても行っており、調査方法および結果の詳細についてはこれらの拙稿を参照いただければ幸いである。
- 4) 家庭教育経験については、「あなたは次の時期に、家族から日常的に勉強を教えてもらうことがありましたか」の質問に対して、小学校低学年時、小学校高学年時、中学生時、高校生時のそれぞれについて、あてはまる時期の合計数を求めた。習いごと経験についても、「勉強以外の文化活動（音楽などの習いごと）」について、同様の時期の合計数を求めた。
- 5) なお、関西と北陸・上越の大学で家庭教育経験、ルーアン・バリ第8大学で習いごと経験との関連がみられるのは、その経験がもつ相対的な希少さとも結びついていると思われる。つまり、全体として家庭教育経験はルーアン・バリ第8大学で多く行われており（「経験なし」の比率31%に対し、関西と北陸・上越の大学では48%にのぼる）、習いごと経験は関西と北陸・上越の大学で多く行われる（同じく55%に対して14%）。

文 献

- アレゼール日本編, 2003, 『大学界改造要綱』, 藤原書店.
- Bok, D., 2003, *Universities in the Marketplace : The Commercialization of Higher Education*, Princeton University Press. = 2004, 宮田由紀夫訳, 『商業化する大学』, 玉川大学出版部.
- Bourdieu, P., 1979, *La distinction : Critique sociale du jugement*, Minuit. = 1990, 石井洋二郎訳, 『ディスタンス・社会的判断力批判・Ⅱ』, 藤原書店.
- Bourdieu, P. et Passeron, J.-C., 1964, *Les Héritiers : Les étudiants et la culture*, Minuit. = 1997, 石井洋二郎監訳, 『遺産相続者たち—学生と文化—』, 藤原書店.
- 藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉, 1987, 「文化の階層性と文化的再生産」, 『東京大学教育学部紀要』第27巻, pp.51-89.
- Grignon C. (dir.), 2000, *Les conditions de vie des étudiants : Enquête OVE*, P.U.F.
- 喜多村和之, 1986, 『学生消費者の時代』, リクルート.
- 溝上慎一, 2004, 『現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる—』, NHKブックス.
- 宮島喬・藤田英典・志水宏吉, 1991, 「現代日本における文化的再生産過程—ひとつのアプローチ—」, 宮島喬・藤田英典編, 『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』, 有信堂, pp.153-204.
- 大前敦巳, 2003, 「高等教育進学者における学習経験の同質性と多様性—関西と北陸の文科系学生を対象とする調査結果の探索的分析—」, 『上越教育大学研究紀要』第23巻第1号, pp.61-74.
- 大前敦巳, 2004a, 「大学進学者における学習経験と学習性向—ユニバーサル・アクセスに向けた『新しい時代の教養教育』の文化的条件—」, 『教育経営研究』第10号, pp.15-27.
- 大前敦巳, 2004b, 「キャンパスの人間形成機能からみた現代の学生生活—上越教育大学と関西私立大学・短大の調査結果から—」, 『上越教育大学研究紀要』第24巻第1号, pp.45-58.
- Riesman, D., 1981, *On Higher Education : The Academic Enterprise in an Era of Rising Student Consumerism*, Jossey-Bass. = 1986, 喜多村和之・江原武一・福島咲江・塩崎千枝子・玉岡賀津雄訳, 『リースマン高等教育論—学生消費者主義時代の大学—』, 玉川大学出版部.
- Ritzer, G., 1998, *The McDonalidization Thesis : Explorations and Extensions*. = 2001, 正岡寛司訳, 『マクドナルド化の世界—そのテーマは何か?—』, 早稲田大学出版部.
- 武内清, 1999, 「学生文化の規定要因に関する分析」, 『学生文化の実態, 機能に関する実証的研究』, 平成8~10年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書, pp. 5-13.
- 武内清編, 2003, 『キャンパスライフの今』, 玉川大学出版部.
- 潮本守一, 2004, 『世界の大学危機—新しい大学像を求めて—』, 中公新書.
- Vourc'h, R., 2003a, "Loisirs et pratiques culturelles des étudiants", *OVE Infos*, no 7, pp. 1-8.
- Vourc'h, R., 2003b, "Vivre à Paris, vivre en province : Grandes villes, villes moyennes et petites villes", *OVE Infos*, no 8, pp. 1-6.
- Wacquant, L. J. D., 1996, "Reading Bourdieu's 'Capital'", *International Journal of Contemporary Sociology*, vol.33, no. 2, pp.150-170. = 2000, in Robbins, D. (ed.), *Pierre Bourdieu*, vol.II, Sage, pp.234-250.

Social Signification of Cultural Capital for Today's University Students

— An Analysis of Survey Results in Kansai and Hokuriku-Joetsu Districts —

Atsumi OMAE *

ABSTRACT

In this paper, our concern is to consider social signification of cultural capital for Japanese university students today, according to survey results in Kansai and Hokuriku-Joetsu districts in 2002. As many developed countries, the expansion of higher education has changed student life such as "student consumerism", "commercialization of university", etc. Referring to a national survey in France by Observatoire national de la Vie Etudiante (OVE), we analyzed the same questions about cultural activities in relation to social origins, leaning experiences and present student life. The acquired experiences and the commitment to university life make progress in legitimate cultural activities, while the "Arubaito" part time jobs have an effect on popular culture. It follows that cultural capital is accumulated by "distance from necessity" which results mainly from school and university effects rather than social origins.